

『虎王は花嫁を淫らに啼かす』

著：淡路水

ill：北沢きょう

次の日、伊里弥はひどい熱を出して寝込んでいた。無理もない。疲れていた上に、夜中から朝方にかけてまったく寝かせてくれることもなくディーマと体を繋げていたのだから。

「伊里弥様、おかげんはいかがですか」

ミハイルが伊里弥の部屋を訪ねて、処方した薬を飲ませてくれた。

どうやらミハイルを呼んだのはディーマらしいのだが、伊里弥はまるで覚えていない。ぐったりと意識を失っている間にディーマは部屋から出て行ってしまい、代わりにミハイルと小間使いの少女が伊里弥の世話を焼いていた。

しかも、眠っている間に部屋も替えられてしまっていた。ぼんやりと目を彷徨わせるとまるで様子の違う部屋に伊里弥は戸惑う。

ゆうべまで伊里弥がいた部屋よりも格段に豪華だ。ベッドも広く、どれだけ寝返りを打っても落ちそうもなかった。

「ここは……？」

すかさずミハイルが答えた。

「……離宮でございます」

「離宮……？ どうしてここへ？」

熱に浮かされ、掠れきった声しか出ない。

離宮だなんて……。あえて別の場所に伊里弥を移した意図がわからない。

しかし、ゆうべされた数々のダメージが一気に噴き出ているようで、声を出すのも辛くて仕方がなかった。

はあ、と息を吐いた。それが唇に触れると熱くて、ああ自分は熱があるのだな、と理解した。

「まずはゆっくりお休みください」

ミハイルが眉を寄せて、唇を噛んでいる。伊里弥の問いへの返事はなかった。

考えるのも億劫だった。今はまだ眠りたい。

それがわかったのか、ミハイルはそれ以上なにも言わず、黙って部屋を立ち去った。

伊里弥は眠り続けた。うとうととしている間に、額や頬をそっと撫でる感触を覚えたが、夢だったのかもしれない。

なにしろ、ずっと長い夢を見ていた。

夢はこれまで見続けていたどの夢ともまるで違っている。

夏の森で降り注ぐ日差しの中、虎の姿になったディーマと寄り添っている夢。とても幸せな気持ちで、互いに体を寄せ合っている。ただただ幸せな夢だった。

「……………ん」

気がつくと、眠りながら泣いていたらしい。顔が涙に濡れている。

「あれは……」

夢の中にいた自分は自分ではなかった。姿形は自分にそっくりだったけれど、自分とは違うとはっきりわかる。

「ひいおじいちゃん……だったのかな……」

伊里弥は曾祖父とよく似ている。だからきっとあれは曾祖父のイリヤなのだろう。

もしかしたら、と伊里弥は思った。幼い頃から見ていた、あの森を駆ける夢、あれもディーマとイリヤ……ではないだろうか。

ゆうべ自分を抱いたディーマはしきりにイリヤの名を呼んだ。彼らの間にはなにかあったのに違いがない。でなければ、彼があんなにも……聞いている方が悲しくなるような声で名を呼ぶことはなかったはずだ。

それはさておき、と伊里弥は重い体をのろのろと動かした。

ミハイルが処方してくれた薬がよく効いたのか、熱は下がっているようだが、そのせいで寝汗をかなりかいてしまっていた。

着替えか、でなければタオルかなにかないだろうか。

そう思いながら起き上がる。あたりを見回すがそういったものはなにもない。部屋の外に誰かいれば持ってきてもらえるかも、と伊里弥は部屋の扉へ向かう。

「いた……」

体中が痛くて堪らない。ただでさえ足腰がガタガタなのに、おまけに熱を出したあとだ。それだけにまだふらつく。

ディーマに陵辱されたことについては、考えたくもなかった。男に犯されるなんて、惨めで堪らない。だからといってめそめそと泣くだけなのは違うような気がした。

「とにかくまずは謝ってもらわないと」

伊里弥の気持ちを無視して行為に及んだというのは許しがたい。

—イリヤ……。

あの切ない声が耳から離れないでいた。

あれが伊里弥ではなく、イリヤを呼ぶ声だったとするならなおのこと許せない。自分はイリヤではないのだから。

よろよろとふらつく足で、扉の前に立ち、ノブに手をかけた。

が、ガチャガチャと動かしても動かない。

「鍵が……」

部屋の鍵を外からかけられて、伊里弥は外へ出ることができなかった。

「そんな……」

閉じ込められているのだとわかり、伊里弥はその場にへたり込む。途端に体の力が脱け、茫然とした。閉じ込めるためにディーマは部屋を移したのか。

「ドアがダメなら……そうだ」

はっとして、振り返ると、そこには大きな観音開きのフランス扉がある。残る気力を振り絞って、そちらへ歩み寄り、扉を開け放った。

「……………！」

バルコニーへ出て伊里弥は言葉もなく立ち尽くした。目の前に広がっている景色はただの空と青々した木の葉をつけるラーチの木ばかり。窓の側にまで木々が枝を伸ばし、その枝に留まっている小鳥がばさばさと羽音を立てて飛び立っていった。

下を見ると美しい庭園が広がっている。目線を上向けると、庭園の向こうに伊里弥が連れて来られた宮殿が見えた。ここが離宮だというのはどうやら間違いではないらしい。

再び視線を落としたが、見下ろしているだけでクラクラとしてくる。高所恐怖症ではないつもりだったが、気分が悪くなり喉まで胃液がこみ上げてきた。

伊里弥は愕然とした。絶望、といった方が正しいような気がする。

飛び降りでもしなければ、自由にはなれないのだ。かといってここから出ていくのは許さないというディーマの堅い意志が見て取れる。一度犯しただけでは気が済まないというのか。また、そこまで自分に執着するのはなぜなのか。

そのときだった。

コンコン、とノックする音がして、部屋の扉が開く。顔を見せたのはディーマとミハイルだ。

「伊里弥様っ！」

ミハイルは血相を変えて、バルコニーにいる伊里弥の許へと駆け寄った。伊里弥が飛び降りるとでも思ったらしい。

ミハイルに腕を掴まれて、伊里弥は苦い顔をする。

「飛び降りるとでも思った？ そうだね、飛び降りたっておかしくないことをされたもの」

伊里弥は冷たい顔をして部屋の扉の前に佇んでいるディーマを強く睨みつけた。

だが彼は痛くも痒くもないという表情のままなにも言わずにいる。

（あんなことしたのに……平気な顔をして！）

伊里弥は腸が煮えくり返るようだった。彼にとっては伊里弥の体などどうでもいいのだろう。

「申し訳ありません」

ミハイルが神妙な顔で伊里弥に謝った。

「ミハイルに謝罪してもらってもどうしようもないでしょう？ ディーマ本人が謝るのが筋じゃないの？」

もう一度伊里弥はディーマを睨めつけた。謝って欲しいのはミハイルではない。ディーマだ。

「……申し訳ありません」

ミハイルにもそれがわかっているらしく、恐縮しながらオウムのように繰り返し謝罪の言葉を口にする。彼はディーマに仕えている身だ。だからディーマの代わりに謝っているのだとわかっているが、伊里弥には腹立たしいことに変わりない。

「しかもこんなところに閉じ込めて……！」

喋っているうちに怒りが湧いてくる。握りしめた拳をわなわなと震わせる。

伊里弥はミハイルの腕を振り払って、扉の方へ向かった。

「そこ、どいてください」

扉に立ち塞がるディーマに伊里弥は怒りを滲ませた声で言う。が、彼はそこからまったく動かない。

「どいて、って言っているんです。聞こえないんですか？ ……どいて！」

イライラとした感情をぶつけるように伊里弥は言い放った。

それでもなおディーマはそこから動かず、伊里弥を黙って見ているだけだ。表情のない灰色の方の目がしゃくに障る。伊里弥の怒りが頂点に達した。

「こんなことするためにおれをここへ連れてきたってこと？ おれを閉じ込めてどうしようっていうの……！」

激昂し、伊里弥は叫んだ。

「どうしよう？ 言ったはずだ。おまえはイリヤの代わりだと。そう、閉じ込めたいくらいおれは花嫁を愛しているのがわからないか」

茶化したようなディーマの口調がいまいましい。ますます伊里弥の怒りが増す。

「なにが愛だ……！ そんなものあなたにはないくせに！」

思わず手が出る。ディーマの頬を平手で張った。パシンと音が鳴る。しかしディーマは眉ひとつ動かすこともない。涼しい顔で伊里弥を横目で見るだけだ。

伊里弥はぐっと拳を握った。

力の差。

自分が結局弱者であることを思い知らされる。彼に力ではまるで敵わないことは一目瞭然で、それがどうしようもなく悔しい。

「わかりました。そのドアから出るなということでしたら……」

伊里弥はくるりと体を翻し、再度バルコニーへと足を進めた。

だが、まだ熱が下がりきってはいなかったのか、ぐらりと目眩がし、伊里弥はふらりとよろめいてしまう。

「あぶない！」

ミハイルは駆け寄り、傾いだ伊里弥の体を抱きかかえた。

「放して！ 放してください！ おれはここから出ていく！」

伊里弥はじたばたと暴れる。ミハイルは伊里弥を押さえ込みながら「ディーマ……」と扉の前で腕組みをして立ち尽くすディーマの名を呼んだ。

ディーマはつかつかと歩み寄ると、伊里弥をミハイルから奪い取るように抱き、ひょいと体ごと肩の上で抱える。

「下ろして！」

伊里弥は抵抗して叫ぶが、ディーマはそのままベッドまで歩いていくと、どさりと伊里弥を柔らかいマットレスの上に下ろしその体を押さえつけた。

「ミハイル！」

ディーマはミハイルを呼ぶ。ミハイルはその声に戸惑った表情を見せた。動かないミハイルをディーマはもう一度呼びつけた。

「ミハイル！」

ミハイルはしぶしぶといったように、ディーマの側へやってきた。そうしてベッドサイドにあるチェストの中からあるものを取り出しディーマに手渡す。

伊里弥はそれを見て、目を剥いた。

「そっ……それ……」

ディーマが持っているのは太い鎖。その先には筒状をした金属の輪。美しい装飾が施されてはいるが、それは手枷か足枷の類のようだった。

「おとなしくしていればこんなものは必要なかったんだが、仕方がない」

ディーマは冷たく言い放つ。

そうしてミハイルへ視線をやり、そしてくいと顎で伊里弥を指した。

ミハイルは伊里弥から顔を背け、喉の奥から絞り出すような悲痛な声で「すみません」と言いながら、伊里弥の体を押さえつけた。

ディーマの手が伊里弥の足に触れる。

足枷なのだ、と伊里弥はじゃら、と鎖が鳴る音に耳を塞ぎたくなり、それを見たくなくて目を逸らした。

冷たい感触を足首に覚える。実際のところはさほどの重さでもないのだろうが、伊里弥にとってはかなりの重みを感じた。

その重みはもうここから逃れることができないという、絶望からくるものなのか。

カチャリ、と足下から鍵をかける音が響き、伊里弥の絶望をさらに深めた。

「ディーマ……教えて。なぜこんなことを。おれを犯しただけでなく……閉じ込めて……！」

ディーマは黙って立ち上がると伊里弥を一瞥し、くるりと背を向ける。

「ミハイル、行くぞ」

彼はミハイルに声をかけるとそのまま伊里弥の側から離れていく。

伊里弥にはもう起き上がる気力も残っていなかった。背を向けた彼の表情はなににも見えない。どんな顔をしているのか、なにを思っているのだろうか。

こうやって伊里弥を拘束して、閉じ込めて……彼は伊里弥の曾祖父の裏切りに対する報復だと言うが、それほどまで憎んでいるのはなぜなのか。

ディーマとミハイルが部屋を出て行ったあと、伊里弥は俯せに姿勢を変える。じゃら、という鎖の音に心が痛くなりながら、枕に顔を伏せた。

徐々に、枕に自分の涙が滲んでいくのがわかる。

どうあがいても、なにをしてもこれ以上どうにもならないのだ。だったら流す涙など無駄なものだった。

だがやはり心が軋む。

こみ上げる嗚咽を堪えることもなく、伊里弥はただ泣き続けた。

伊里弥が監禁されて、数日が経った。

足枷の鎖は長く、部屋のバスルームにまでは届く長さであるため風呂やトイレは問題なく使用ができた。

ミハイルがときどき伊里弥の様子を見に来るが、顔を合わせたくなかったため、いつも狸寝入りをしてごまかしている。とはいえ伊里弥の見え透いたごまかしなど彼にはわかっているはずだ。その証拠に伊里弥を無理に起こすことはしないで黙って立ち去ってくれていた。

ディーマは……あれから姿を見せない。ミハイルに止められているのか、それとももう伊里弥には飽きたのか。

伊里弥にとってはそのどちらでも構わなかった。今は彼の顔をまともに見られない。

ただぼんやりと心を虚ろにして日々を過ごすだけだった。

そんな中で伊里弥を癒やしたのは、食事や着替えを持ってやってくる、可愛らしい小間使いの少女。一番はじめこの館に伊里弥がやって来たときに覗き見をしていた子だった。目がくりくりとして明るい可愛い子だ。

「伊里弥様、こちらに着替え置いておきますね。では失礼します」

「……ありがとう」

伊里弥が礼を言うと、彼女はにっこりと笑う。その笑顔がとても可愛らしい。彼女の名前がニーナだということをようやく昨日知った。

というのも伊里弥は監禁されてから気持ちを閉ざしてしまい、誰とも話すことができなかったからだ。それほど伊里弥の心はディーマの仕打ちに深く傷つけられていたのだ。

それを癒やしてくれたのがニーナだった。

「ディーマ様のお客様ってどんな方かなって……ちょっと見るだけのつもりだったんです。でも伊里弥様がとってもきれいで、ついつい見とれてしまって」

と、あ那时的の言い訳をしていた。

「わたし、精一杯お世話しますねっ」

そう言いながら、笑顔を見せてくるくと機敏に働く彼女を見ていると気持ちが安まった。甲斐甲斐しく世話をしてくれる彼女にだけは、伊里弥もいくらか口をきくようになっていた。

だがあれから食欲もなく、出された食事もほとんど口をつけずにいたせいか、見る間に伊里弥は痩せていった。熱は下がったが代わりにげっそりと頬がこけた。

その日、フランス扉の向こうの景色が夕焼けに染まりはじめた頃、ドアの開く音が聞こえた。

「伊里弥様、お夕食をお持ちしました」

ミハイルが食事をトレイに載せて持ってきた。食事はいつもニーナが持ってきてくれるから油断した。まさかミハイル自ら持ってくるとは思わなかったのだ。トレイの上にはジャガイモのパンケーキの上にチーズを載せたもの。そしてスープと白いパン。

伊里弥はトレイとミハイルの顔を交互に見、そしてそれらから顔を背けた。

体を動かすエネルギーのすべてが伊里弥から抜け落ちてしまったかのように、美味しそうに湯気をたてている食事を見ても食べたいという気すらなくなっていた。

「伊里弥様、少しでも召し上がってください。でなければ体が保ちません」

「……食べたくないんだ」

伊里弥は細い声で投げやりに言う。

「……わたしたちの……ことにディーマがあなたにしたことは到底許されることではないと思っています。あなたにしてみれば、騙されたも同然ですから……。わたしもまさかディーマがこれほど強引なことをするとは思ってもみませんでした。……言い訳でしかありませんが」

ミハイルの言葉に伊里弥の体がびくりと震えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>